Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Gerard Delanty, ”Modernity and Postmodernity : Knowledge, Power and the Self”, Sage publications (2000)
Author(s)	松岡, 寛展
Citation	年報人間科学. 2004, 25, p. 231-236
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11503
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

◇書　評◇

Modernity and Postmodernity
—Knowledge, Power and the Self—
Gerard Delanty

Sage publications (2000)

松岡寛展

我々が今日身をおいているのは、モダンか、それとも、ポストモダンか。また、モダニティ・ポストモダニティは、どのように定義できるか。こうした問題は、過去十年以上にわたって、繰り返し問われてきた。実際、現代の社会理論を打ち立てようと試みる社会学者にとって、こうした問題は、避けて通れない問題であり、同時にまた、理論家によって、大きく立場の分かれる問題でもある。

本書では、こうした問題に対して、ポストモダニティの理論家だけでなく、多様なモダニティの理論家にも言及しながら、考察が進められる。ただし、その回答は、従来の立場には見られない、著者独自の回答である。著者は、モダンかポストモダンかといった議論の一方の側につこうとはしない。むしろ、こういった区別自体を相対化する立場に立つ。著者によれば、「モダニティとポストモダニティを区別することによって、モダンそのもののラディカル性が不明瞭になってしまう。」(p1) そもそも、モダニティの言説は、プレモダンにおける神学の議論の中に見出せるし、ポストモダニティの言説は、モダンにおける認識の可能性をめぐる議論の中に見出せる（序章、一章）。結局、著者のモダニティ／ポストモダニティ議論に対する立場は、次の言葉に集約される。「この立場の要点は、モダニティとポストモダニティを、対立する立場、あるいは、モダン社会の諸段階として捉えるのではなく、より連続的なものとして捉えるべきである、という命題にある。つまり、本書は、モダニティとポストモダニティの連続性という命題を提供するものである」(序文 p7)。

この議論の検討は、その考察過程において、知識・権力・自己といった領域の検討を伴う。というのも、著者は、プレモダニティ・モダニティ・ポストモダニティを通じて一貫して流れているのが、これら知識・権力・自己の領域に対する懐疑主義である、という見解をとるからである。最終的に、著者は、こうした懐疑主義的言説の検討を通して、現代社会に関する、一定の理論的立場に到達する。すなわち、著者は、現代社会における知識・権力・自己のあり方を、リフレクシヴィティ概念に基づいて、より積極的に基礎づけることを提唱する。本書の特色は、むしろ、このリフレクシヴィティ概念に基づく現代社会論にあるのであり、そこにこそ、注意が向けられるべきであるように思う。

そこで、本書評では、まず、従来のモダニティ／ポストモダニティ議論に対する新たな理論的整理として、懐疑主義・討議性（discursivity）・リフレクシヴィティの言説が知識・権力・自己の領域にそれぞれ浸透していく、「主体の客体からのゆるやかな距離化（distanciation）」（p4）の過程を見ていく。そのうえで、こうした文化的移行を経て、現代社会において展開される「リフレクシヴィティの二つのロジック」、すなわち「一種の脱構築主義と構成主義」（p5）の論理を検討していく。

その前に、まず、本書の全体的な構成を示しておこう。本書は、序章を含めて、九章からなる。まず、プレモダン・モダン・ポストモダンといった従来の境界を不明瞭にする理論にふれ（序章、一章）、こうした時代区分と神学・伝統との関係について考察する（二章）。つづいて、モダニティの限界・問題点をすでに示唆していた、ホルクハイマー・アドルノ、トゥールミン等の理論を紹介し（三章）、ゲーレン、フクヤマ、ルーマン等の理論を検討することで、モダニティの「文化的結晶化」（p73）に伴う、コンティンジェンシー（偶発性）の問題を明らかにする（四章）。さらに、モダニティの救済を試みる、ハーバーマス、ルフェーヴル、ヘラー、カストリアディス、トゥレーヌといった理論家たちの議論に言及し（五章）、コンティンジェンシー問題の解決策として、開かれたコミュニケーションからなる新しいコミュニティ概念を提唱する（六章）。そして、ポストモダン文化を構成する四つの潮流を検討し、西洋モダニティを越えた枠組を提示した上で（七章）、最後に、リフレクシブな自己のあり方について考察し、果てしない脱構築に陥ることなく、より積極的な意味での構成主義を成立させる可能性を模索する（八章）。以上が、全体の理論構成である。

著者によれば、従来のモダニティに対する見方は改められなければならない。すなわち、これまでいわれてきたような、教会による正当化から科学的確実性による正当化への変化は、モダニティを特徴づけるものではない。というのも、モダニティが生み出した認識文化は、確実性ではなく、むしろ不確実性を深化させるものであったからである。そこには、「人間の知識（認識）は、常に、媒介された経験とならざるを得ない」（p2）という限界の認識が見られる。

ポストモダニティは、こうした限界に対する自己認識に他ならない。こうして、著者は、プレモダン・モダン・ポストモダンを厳密に区別しようとする立場を否定し、これらの時代に通底する懐疑主義の言説を見出そうとする。「モダニティは、プレモダンにおける神学の議論内で始まる不確実性の言説の深化を伴う。そして、ポストモダニティの言説も、同様に、宗教的経験の領域で元来生じた問題を解決しようとする、モダン的探求の深化として見なすことができる。」(p2)

懐疑主義は、まず、プレモダンの時代において、知識の領域で始まったが、モダン、ポストモダンへと時代が変遷するにつれて、権力・自己の領域にも浸透していく。権力についての懐疑主義的な言説は、モダンにおける社会契約論の中に見られる。社会契約論は、権力は制限されるべきであり、統治者と被統治者の社会的な契約によって最終的に正当化される、という見解をとる。この見解は、結果として、コンティンジェンシーや不確定性の状態を招く。権力は、権威として、一度かぎりで正当化されず、討議終結の瞬間を制定できない。こうして、古代の権威が、公的な討議にとって代わられる。公的な討議は、コミュニケーションの中で構成されるが、討議終結の瞬間は完全に制定できない。

さらに、ポストモダンの時代には、懐疑主義は、自己の領域にも浸透する。「自己による他者の支配・決定」(p3)といった、モダニティに見られた傾向は、「他者の目を通した自己」(p3)の構成へと移行していく。自己と他者の優越性が逆転することによって、主体性が再構成されるようになる。この変化の下では、自己アイデンティティの物語がもつ持続性に対して、一定の懐疑主義が見られる。こうして、アイデンティティの普遍的な言説は、疑問に付され、自己の構成は、よりリフレクシブな条件のもとにおかれる。

このように、著者は、知識・権力・自己の問題を、懐疑主義、そしてその発展形態である、討議性・リフレクシヴィティの言説とそれぞれ結びつけて論じる。著者によれば、「プレモダニティからモダニティ、ポストモダニティへの移行は、まず、知識の変容、つづいて、政治・権力の変容、最後に、自己の変容という、主体の客体からの距離化として、捉えられる」(p4)。つまり、「知識の懐疑主義」から「権力の政治的制定における討議性」を経て、「自己アイデンティティのリフレクシヴィティ」へと至る三段階の文化的移行が見られる。本書では、こうした三段階の文化的移行を踏まえた上で、つづいて、新たな知識・権力・自己のあり方が論じられる。

懐疑主義・討議性・リフレクシヴィティの言説は、知識・権力・自己の領域における限界のみを意味するものではない。それは、これらの領域の新たな可能性をも示唆している。著者は、リフレクシヴィティ概念を、積極的に捉え返すことで、コミュニケーションに基づく、知識・権力・自己の新たな可能性を模索しようとする。そこで、著者が展開するこのリフレクシヴィティ概念を検討していくことが必要になる。ただし、その際に、第六章で検討されるコミュニティの議論を見ておかなければならない。というのも、著者の掲げるリフレクシヴィティ概念は、コミュニティの可能性といった問

題と深く結びついているように考えられるからである。確かに、あとで見ていくように、筆者のリフレクシヴィティ概念は、何らかのコミュニティを想定した形で、提唱されているように思える。そこで、以下では、まず、著者の提唱するコミュニティ概念を整理した上で、次に、リフレクシヴィティ概念の可能性について見ていくことにする。

著者がコミュニティ概念を重視するのは、現代が「社会的なもの」の危機に直面している段階にあるからである。これまで、社会とコミュニティは、対概念として考えられてきた。そして、一般には、モダニティがコミュニティの破壊によって築きあげられたのに対して、ポストモダニティは、「社会的なもの」の失墜によって成立したといわれている。ここで、著者は、コミュニティ概念によって、「いわれるところのモダン的なものとポストモダン的なものの分断を橋渡し」(p114) しようとする。すなわち、ここで著者が展開しようとするのは、「社会的なものを、コミュニティの観点によって、再解釈」(p118) しようとする試みである。

著者のいうコミュニティは、「認知的秩序としての、より深い意味におけるコミュニティ」(p124) を意味する。ここで、この著者の立場が、決して、従来のコミュニタリアニズムに対する支持を表明するものではない、ということに注意する必要がある。むしろ、著者が提唱するコミュニティは、旧来のコミュニティ概念を一新しようとするものである。著者は、ハーバーマスのコミュニタリアニズム批判を受ける形で、これまでのコミュニティ概念の問題点を指摘する。すなわち、「コミュニタリアニズムは、現存するコミュニティを強調しすぎ、政治を倫理的なものに還元する傾向がある」(p122) とする。こうして、著者は、失われた全体性、道徳的秩序、伝統的秩序の回復としてのコミュニティではなく、「新しい文化的想像体としてのコミュニティ」(p127) を構想する。

このコミュニティ概念で強調されているのは、開かれたコミュニケーションの可能性である。それは、決して、完成された固定的な共同体ではなく、たえずコミュニケーションの過程によって捉え直されるような、不完全な共同体を想定している。しかも、ここでのコミュニケーションは、合意性を前提とするのではなく、むしろ非合意性をも視野に入れるものである。よって、このコミュニティ概念は、他者に向けた開放性を強調するものであり、同一性や統合性に還元できない、討議性をもった存在として捉えられるべきものである。

こうしたコミュニティ概念を想定することで、リフレクシヴィティに基づく社会構想が可能になる。リフレクシヴィティは、「現代社会の文化的特徴であり、個人が文化的選択や不確実性に対処できるようになる能力と大きく関係するものである。」(p160) ただし、著者の用いるリフレクシヴィティ概念は、ギデンズのそれとは若干異なる。著者は、ギデンズのように、リフレクシヴィティ概念を、主体と構造間の二元性 (dualism ではなく duality) に還元するような形で捉えない。こうした捉え方は、「解釈の文化的モデルという意味で、文化がもつ、広大な認知的次元を軽視する」(p160) か

らである。「ギデンズは、文化というものを、社会的行為者が簡単に操作できるようなものとして、非常に薄い意味で用いている」(p160)。それに対して、著者は、「主体と構造の媒介領域としての、文化の自律性」(p160)を確保した形で捉えようとする。つまり、文化的カテゴリーとして、リフレクシヴィティの媒介的な性質を強調しようとするのである。こうしたリフレクシヴィティの捉え方には、あくまでもコミュニティを重視しようという、著者の態度が見て取れるだろう。

さらに、このリフレクシヴィティ概念を通して、著者は、新しい構成主義といった立場を提示する。ここで、この立場は、認識の限界といった消極的な形ではなく、知識・権力・自己の可能性を示唆する積極的な形で提示されている。それは、脱構築による自己の溶解という、ポストモダニティの第一段階を経て、第二段階の自己の形態として、構想されるものである。不確定性は、脱構築思想の最も重要な成果であったが、いまや、それは、社会的行為者が創造的行為をなすための高度な能力を獲得する可能性の条件となっている。そこでは、行為の多くが、コミュニケーション的に媒介された関係の形式で表現されるので、討議の重要性が増大する。その意味で、この構成主義は、開かれたコミュニケーションを指向するものである。そして、こうした構成主義的アプローチの基盤となるのが、認知枠組みとしての文化であり、その母体となるのが、先に提出されたコミュニティ概念である、と理解できるだろう。

もちろん、こうした著者の構想に対して、リフレクシヴィティを可能にする新しいコミュニティは、現実的に見て実現可能か、といった疑問はあがってくるだろう。合意ではなく、非合意をも容認するコミュニティといったものは、成立しうるのか。あるいは、何らかの知識・権力・自己を排除しないようなコミュニティはありうるのか。こういった疑問は、当然、著者に対して突きつけられる。確かに、本書で、コミュニティ概念は第六章でしか触れられておらず、本書だけでは考察が不十分であるように思われる。リフレクシヴィティを可能にする基盤として、コミュニティを考えていくのなら、他の章で、両者の関係性について、さらに綿密な検討がなされるべきだろう。しかし、他方で、本書が、果てしない脱構築に陥ることなく、積極的な意味での構成主義を提示したという点に目を向けたとき、本書は、「大きな物語の終焉」後の知識・権力・自己のあり方について、ひとつの可能性を提示した、と評価することもできるだろう。